アダムとエバの開眼

室田五郎

はじめに

Paradise Lost I 三—三六 においてミルトンはその詩の核心にふれて次のように自問自答する。

誰がまず彼らをあの悪しき反逆に誘いしか
地獄のへびぞ、彼、その奸計こそ
ねたみと復しゅうにかきたてられ、だませり
人類の母をば、

これはミルトンが旧約聖書創世紀のエデン物語を中心にこの詩を語ろうとしていることを示し、更にその背景を詩人の想像力をもってえがこうとする大いなる自信を示したものとみてよいであろう。へびが語る部分を創世記三：四～五は次のようにしるしている。

へびは女に言った。「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです。[1]

そのへびのことばをミルトンは次のように詩の中でかいている。

彼（神）は知る、汝ら
それを食う日に、澄みたる如くなれど
その実くもる汝らの目が、その時完全に
開けて澄み、かつ神々の如くなると
善も悪も神々の如く知るに至りて、

（IX 七〇五―七〇九）

野の生きもののうちでもっともこうかつなへび（創世記三：一）が人間エバの目を開かせることになるこの物語において、へびがエバよりも目のひらけた存在であるということと、そのへびが彼女の目が充分にひらかれていない存在であることを思わせるように行動することが読者に理解される。もちろんこのへびはサタンのことばを語るのである。

サタンは神への反逆のはじめから地獄落ちになって再び彼の部下を統帥するまで一貫して目ざめた存在であり、その役割をそのようなものとして果してきたことを思い合わせるならば、ミルトンがどのようにしてサタンに地上の人間を誘惑させようと考えたかが、ある程度想像つくであろう。

I

Paradise Lost 六巻に、神が天使ラファエルを呼び、地上のアダムを訪れ、アダムに敵（＝サタン）についての警告を伝えるように命じる場面がある。それは、アダムがサタンの誘惑におちいらぬように、また罪を犯させないようにラファエルに忠告させるためであった。神の命令をうけたラファエルは、地上のアダムを訪れて、神が命じたようにアダムに忠告し、エバにもその忠告を伝えていましめるようにアダムに注意をうながした。

さて、アダムは地上に来訪したラファエルをもてなし、彼の会話の中で、彼自身の至福なる体験をラファエルに語りはじめる。アダムは神からあたえられた絶妙なる伴侶についてさんびしている。そのときのアダムの態度はエバの美しさに対して全くひれ伏しているといっても過言ではないであろう。

yet when I approach
Her loveliness, so absolute she seems
And in her self complete, so well to know
Her own, that what she wills to do or say,
Seems wisest, virtuousest, discreetest, best;
All higher knowledge in her presence falls
Degraded, wisdom in discourse with her
Looses discountenanced, and like folly shows;
Authority and reason on her wait,
As one intended first, not after made
Occasionally; and to consumate all,
Greatness of mind and nobleness their seat
Build in her loveliest, and create an awe
About her, as a guard angelic placed.

（Ⅷ 五四六―五五九）

されどわれ彼女の
うるわしきに接する時、彼女完ぺきに
欠くるなく、かくもよく己れを知るとみえ
ゆえに彼女が為しかつ語ることすべて
いと賢く、いと美わしく分別あり善くみゆ
すべて高き知識も彼女の前に威厳を失い
知恵も彼女との語らいのあいだに
顔色を失い等しき愚かさを示す、
権威と理性が彼女にはべり、
はじめに意図されし如し、のちに偶然に
成りし如くならず、更にすべてに加えて
心の大いなると気高きとはその座をば
彼女のいと美わしき中に据えて、彼女の
周りに尊厳をつくる、天使の護りの如く、

五五七 行における Greatness of mind は注解によれば magnanimity（雅量）と同じいみであり、それは英雄的美徳であり、偉大な魂の特質であり、古典的な美徳を含む美徳と考えられていて、神の栄光を求めるものであるとされている。[2] ミルトンがこの美徳の特質をアダムの口を通してではあるが、エバにあたえたのは皮肉なことといわなければならない。なぜならこれはアダムがエバを自分自身以上に高く評価しすぎていることを示すために[3]ミルトンが敢て意図したとみてよいと思われるからである。

ここでラファエルは「自然を咎むな、自然はその分を果せり／汝は自が分を果せ」（Ⅷ 五六一―二）といってアダムを叱る。この自然とは神とも解釈できるが、むしろ神が溢るるばかりに人にあたえる自然の美しいめぐみともいうべきもので、神のめぐみが溢れるばかりだからといって、神のわざなる自然に目がくらみ心うばわれ、神を忘れてあやまちを犯すなとラファエルはアダムに言っているのである。

さらにラファエルはつづけて言う。

汝何をほむるか、何が汝をかくも喜ばすか
うわべか、それはまさに美し、又ふさわし
汝の想い、汝の尊敬、汝の愛に、されど
服従には適わぬ、己れを彼女とくらべよ
更に判ぜよ、およそいとよく益なるは
自尊の心ぞ、もししかと正と義に立つこと
よく果さるれば、

（Ⅷ 五六七―五七三）

さらにラファエルは理性（reason）と情欲（passion）とを対照してアダムに説く。

彼女と親しむ中に汝が高しと見出すもの、
人を魅し、人間的に、理性的なるを愛せ、
愛に汝はよく生く、情欲にはさ非ず、
その中に真の愛はなし。愛はきよむ
思いをば、又心を広げその中心を
理性にもつ、又思慮深し、愛は階梯となり
それを経て汝は天の愛に昇るを得ん、
肉の喜びに沈むことなくて。この目的ゆえ
汝の伴侶は獣の中に見出されざりき、

（Ⅷ 五六六―五九四）

ラファエルに対するアダムの反応は、

かくも美わしく造られし上べも、すべての
生きものに共通なる生殖の何ものも
（睦みの床をとりわけ高く、神秘的尊敬を
もてわれみるも）われを喜ばせず、
わが喜びはあの美わしきしぐさ、
あのいくたの上品な振舞、それ日々に
彼女のすべてのことばと行いから流れ愛と

素直さとまじる。それが示すのは偽りなき
心の結び、或いは二人にして一つの魂なり、
夫婦なる二人の中に調和をみることこそ
調べよき音が耳にひびくより美わしきこと
されどこれらに服せず、われ汝に明かすは
心中これらからわれ感じしこと、それとて
われ負けず、種々のものに出合う、感覚
から種々に現われるものを、されど常に
最善をよしとして最善に従う。

（Ⅷ 五九六―六〇二）

以上のラファエルとアダムのやりとりは微妙なものを含んでいる。なぜなら、ラファエルが人間らしく理性的なものを愛せよというのに対し、アダムの反応の中には理性的なものには一言もふれていないで、むしろ夫婦の調和とか一致とかが前面にでてくる。[4]

そしてついにアダムはラファエルの懸念に対して充分にこたえることなく話題をかえてしまう。読者はここが大きな問題を残すことになる重要なポイントの一つであろうと感ぜずにはいられないだろう。ミルトンはここに於てアダムとエバの夫婦の中に非常に危険なものがあることをラファエルに見せているのである。

ここでアダムとエバの堕落は始まっていたという意見がでても不思議はない。なぜならば彼らは人間本来の姿（Ⅷ 二八七―三四〇）、すなわち「聖なる理性」（Ⅷ 五〇八）をもち、自らを知り、それゆえに神と交わるふさわしい高邁な心をもち、つつしんで高き神をあがめるところの者（Ⅷ 五〇九―五二五）とは距離ができているようにみえるからである。

Ⅱ

サタンはねたみと復しゅうにかきたてられた存在であり、天の戦いに至るラファエルによる物語の中では悪意と憤怒をつのらせて眠りを拒んで腹心の部下を目醒めさせた存在である（Ⅴ 六五七―六七二）。又地獄に落ちたのちも、ミルトンはサタンをして眠ることもまどろむこともしない存在たらしめている（Ⅰ 五三―七五）。そのサタンは部下たちに対して強引であり（Ⅰ 一五七―一六八、三五―三〇）、そのレトリックによる説得は彼をしっかり教育していく。その姿は壮大にして偉大に映る存在になっている（Ⅰ 一九二―二七〇、二六四―二九八）。

このサタンが地獄を苦難の後にぬけ出て地上に探索に来たのは、地獄の中で意気沮喪している部下の軍勢を地上または空中に住まわせたいと思ったからだと言っている（Ⅳ 九三八―九四〇）。サタンと人との最初の明白なかかわりは、サタンがエバの眠りを妨げようとした事件（Ⅳ 八八三）ではじまった。このようにサタンがエバの眠りを不快な罪深い誘惑の夢で妨げたことからアダムも困惑した。この事件ののちにはじめて神はラファエルをアダムのところへつかわした急迫した事情を説明させたのである。

「何故汝眠るか、エバよ」（Ⅴ 三八）は夢の中でサタンがエバによびかけた声である。夢ではあるが、これはただの夢ではない。それはサタンのしわざであり、それがエバ自身の忘れえない体験となることは想像にかたくない。

サタンはエバの耳もとに蝦蟇（がま）に化けてうずくまって、エバに夢をみせていたのである（Ⅳ―八〇〇以下）。そしてエバ自身のことばによると、天使らしき姿が夢の中で禁じられた知識の木のそばに立ってその木の実を食べ、エバにも食べるようにすすめた。

これを味わえ、さらにこののち神々に列し
汝自身女神たれ、地に縛られずに、
時に空に飛べ、われらのごとくに、時に
天に昇れ、己が徳力にて、かくて見よ
神々が天に住む状を、かく神々しく生きよ
（Ⅴ 七七―八一）

これは夢とはいえ、その内容は神の禁制を破る生々しい事件を暗示するものであるためエバの気持を暗く重くしてしまった。アダムはエバの気持をひきたてるつもりでなぐさめた（Ⅴ 二六―二三）。しかしアダムのなぐさめは、読者には夢の果たす役割が決して小さくないだろうと期待させるのに役立っている。

この夢（Ⅴ 三六―九三）は実際に禁制を破る場面（Ⅸ 三六八―七三）の注の役目乃至平行する内容となっている。[5] 実際の誘惑の場面に於て、夢の中の声が再現されていることを見れば、ミルトンの意図は明白である。

この夢はサタンがはじめてアダムとエバを園の中で見たときに、その「憎むべき光景」（Sight hateful, sight tormenting!）（Ⅳ 五〇五）ゆえに苦しみながら考えついた計画そのものであるといっていいであろう。しかしこの夢の中で

「地に縛られずに／時に空にとべ……かくて見よ神々が天に住む状を……」という天使らしき者の声は、ミルトンが十九歳（一六二八）に *At a Vacation Exercise in the College part Latin, part English* で語った想像の飛翔を思わせるものである。それを以下に引用する。

……深く酔いたる心が高く舞い上りて
回転する極の上に至り、且つ天の入口にて
中を覗き、幸いなる神の姿を見る如き
即ち神がいかづちの玉座の前に伏し
髭こき Apollo の歌に聴き入る、そは黄金弦の
調べに合わせたり、その間 Hebe
不死の酒を彼女の父なる王に運ぶ、
次に尽きざる火焔の天空を通り抜け
直下なる広大な大気の霞掛かる処を抜け
又雪白き山々といかづち積もる高みを抜け
遂に知る碧眼の Neptune が吠えるさまを、
それ天の権威に逆らい波を結集めて構う……

（IX 三三—四四）

このように神々のようになって空を飛翔し神々の天に住む様子を覗くという想像が、少年時代のミルトンの心にあったのである。今はそれすらもこえて神の摂理をうたうミルトンであるが、かつての異教的な目の醒めるような想像上のたのしみが *Paradise Lost* のサタンのささやきの中に現われたと言っても言いすぎではあるまい。

III

Paradise Lost 九巻に於てエバはアダムに別行動をしようと提案する。アダムはラファエルの忠告にもとづいて、彼女の提案が危険であるといって再考をうながす。

妻なるもの、危険か恥辱がひそむところで
夫の近くにとどまりていと安くふさわし
夫は妻を守り、妻と共に最悪を耐うる故に

（IX 二六七—二六九）

それに対してエバは答える。

されど汝それ故に神又は汝に対する
わが真実うたがうとは、敵ある故にとて
試みるかもしれぬとて、意外

（IX 二七九―二八一）

エバは自ら完全であって死ぬことも痛むこともないことを確信し、外からの暴力をうけることはありえないといい、又もしあったとしてもそれをしりぞけることができると信じている。しかしアダムは敵の誘惑にあってエバがそれにおちいるのではないかと考えている。

エバは意志のない人形のような存在ではなく、自ら考えて行動する存在であることをミルトンは示している。しかし彼は他方でエバは自由な意志を神への服従に向けるべきであると意図しているように思われる。ミルトンはエバに次のように語らせる。

されば何が信仰・愛・美徳か、もしひとりで
外からの助けに支えられずに試みられずば、
故にわれらの幸いなる状をうたがうな
かしこき造り主に不完全に残されて
一人にも二人にも安全ならぬかの如くに、
弱きかなわれらの幸い、もしこれ正しくば、
エデンはエデンならず、かく無防備では、

（IX 三三五―三四一）

エバはアダムの心配を神に対する不信仰のごとくに考えており、神は人を試みにみずから克つものとして造ったことを信じていこうと言っているようだ。これはミルトンが *Areopagitica* の中でのべていることと非常に近いことがよくしられている。[6]

エバの上記の発言は、エバが考えにも行動にも自由があって不当に束縛されていなかったことはよいことだとミルトンが考えていたことを示すものと思われる。そして又、人が自由であってこそ信仰と服従の意味が明らかになると、ミルトンは考えたであろう。それについて誤解がないようにミルトンはアダムの口を通して確認している。

But God left free the will, for what obeys
Reason, is free, and reason he made right,
But bid her *well beware*, and *still erect*,

Lest by some fair appearing good surprised
She dictate false, and misinform the will
To do what God expressly hath forbid.

（Ⅸ 三五一—三五六）

されど神、意志を自由とせり、それ理性に
服するもの自由、又神、理性をば適わしく
造りしが命ず、よく醒めよ、常に立てと
それ何か美しき姿のものにおどろかされて
誤まり指揮して、意志に誤まり伝え、神が
格別に禁じしことを為すことなからんため、

（イタリックス及び傍線筆者）

アダムは人が自由であるようにつくられたのは神の恩恵によるのであり、その自由を神の善意の恩恵に目ざめて用いるべきであるといい、神のみに従い、他の一切のものの奴隷とならないことが自由であり、それが正しく善をえらびとる理性にかなう自由であり、そのためには目をさましているように神が命じているとエバに語っている。

アダムはこのあと（Ⅸ 三五七—三六三）に於てもエバに目をさまさなければいけないとくりかえす。そして一人よりも二人いっしょにいる方が目をさまして誘惑におちいらないようにすることができるというのである。先にラファエルから理性について教えさとされたアダムが、今度は同じように理性についてエバに懸念を表明しているのである。一人ではなく、二人でいて、誘惑の危険を未然に防ぎたいとアダムは思っているのである。

ミルトンは *Areopagitica* において理性はえらび、意志に命令をあたえる能力であると説いている。この考え方はミルトン独自のものではないらしい。当時の学校で用いられたテキストにはこの主題はありふれたものであったようである。それは聖アウグスチヌスにまでさかのぼるものであるといわれている。(7)

理性は誤りをおかすことがある、しかしそうならないために醒めた良心ともいうべき「正しき理性」(8)を必要とする。「正しき理性」は自由なる意志に正しき命令をあたえる能力をもつことになる。人間の理性を誤らせるのは感覚である。(9) その誤った理性は誤った命令を意志にあたえる。「正しき理性」は神の意志が何であるかを問い、神に服従することによって自ら目ざめた選択者として立つといって

もいいだろう。「正しき理性」は人を自由に神に服従させるのである。いいかえれば目ざめた良心は神に自由に服従する。

サタンはアダムとエバの神への自由なる服従に亀裂をおこさせるものとして、ここに登場する。サタンが入りこんだへびはまず感覚的にエバをおどろかせ、それによって理性をあやうくし、神の禁制を無意味な、いやかえって有害な束縛と感じさせ、巧妙にも神をうたがわせ、神の恩恵を認識するよりもむしろ被害者意識をもつように導くのである。そうしてそのへびは自らのエバを弁護する立場をとりつつ、神への服従と自由の一致を破らせるように働く。

アダムが誘惑の可能性を懸念したことを神に対する不信仰のように考えたエバには危険がひそんでいた。すなわちへびの誘惑の可能性に対する軽視があったのである。なぜならエバは次のようにいっているからだ。

ただわれらの敵
こころみつわれらに向かうは、われらの
徳をあなどりてなり、彼のあなどりは
われらの面をけがさず、かえって自らを
いやしむ、さらば何とてわれらさけ、
恐るべきぞ、われらむしろ二重の名誉を
得ん、彼の読み違いにより、われら内に
平和、天恵まん、事の結果を見届けて、

（Ⅸ 三七―三四）

エバはへびの誘惑の可能性を無視することは正しいと思っている。しかし神の命令に服従することこそ正しいと思っているアダムにとって、エバの態度を神への信頼とみなすべきかどうかはむずかしく、むしろエバの議論がアダムの耳には或る程度快い正論のごとくにきこえたにちがいない。

エバの神への信頼は感覚的なものであり、誘惑の可能性は考えられず、かえってそのような考えを軽蔑する。それは自信過剰と危険の軽視となってあらわれるのでサタンの誘惑にかかりやすい存在となっているといえるであろう。

Ⅳ

サタンの戦略はエバが神への信頼に於て純粋であり、造

られた姿で充分に満足している祝福された状態にいるときに、それをうたがわせることなのである。へびは彼女に神からあたえられている状態以上のことを願わせ、現状に不満を持たせる。その不満をあおるように、へびは神に対してエバを弁護する立場をとる。ミルトンは次のようにへびの弁護ぶりを華々しく示す。

それに似たるは昔さる名高き雄弁家が
アテネか自由のローマなる弁舌はなやぐ
ところで、ある大義を弁ぜんと黙然
構えて立ちしに一つ一つ体の部分、
動き一つ一つの行為が語る前に聴衆を魅し
ときに主題の中心から始めし如し、一刻も
正義の熱情ゆえ序論の猶予ならじと、

（IX 六七〇—六七六）

へびはエバに善悪を知る木の実には運命をのりこえる力があり、現にそれを自ら経験した（IX 六八八—六九〇）と誇らしげに語って次のように語りつづける。

ならば何故善悪の知識は禁じられしか
それただおじしめ低め、無知にとめおかん
ため、汝ら拝する者らを、彼は知る、汝ら
それを食う日に、澄みたる如くなれど
その実くもる汝らの目が、その時完全に
開けて澄み、かつ神々の如くなると
善も悪も神々の如く知るに至りて、

（IX 七〇三—七〇九）

エバはしばしのためらいののち（IX 七四四）それを食べ、これほどおいしい果物はないと思い、神々の一人のごとくになりたいと思ってむさぼり食べた（IX 七八七—七九一）。その間にへびはくさむらにかくれてしまった（IX 七八四—七九五）。エバはアダムのもとにかえり、彼に善悪を知る木の実を食べたと報告するが、それがへびの言う通りの効果があったと（IX 八七四—八七七）弁解する。

アダムはエバをはげしく責め歎くが彼もエバのことばを信じはじめる（IX 九三二—九三七）、そこで当然のことながら神をうたがいかろんじはじめる。アダムはエバと一体であることを決意し、同じ罪、同じ罰をかぐするのである。エ

バはアダムが、この禁じられた木の実を食べた「経験」（Ⅸ 八〇七）のゆえに、彼の彼女に対する愛情が明瞭になったことをよろこぶ。

そしてこの木の実のおかげで善から善が生まれた（Ⅸ 九七三）と思うのであり、次のように言う。

　　されどわれ感ずるに
結果はまるで逆に、死ではなく生が
増し、目醒まし、新しき望み、新しき喜び
神々にふさわしき味、これまで美味とて
口にふれしもの、無味かつ粗しと思われる、
（Ⅸ 九八三―九八七）

Ⅴ

へびにひそんだサタンがエバに善悪を知る木の実を食べれば目が開けると言ったと創世記にしるされているが、ミルトンにとってサタンのいう目ざめは何であったのか。サタンは地獄の中でも、地獄をはなれても悪に目ざめていた。サタンは地獄に於て次のように叫んだ。

おちしケルブよ、弱きこと哀れなり
果たすにも忍ぶにも、されどこれを知れ、
いかなる善もわれらのわざとならず
常に悪をなすこそわれらの唯一の喜び、
そは彼の高意に逆らうことなれば、
われら抗らう者故、もし彼の摂理
われらの悪から善をひき出すことを求めば
われらの働きその目的をくつがえし
善から常に悪の手段を見出すことなるべし。
（Ⅰ 一五七―一六五）

不滅の憎しみに目ざめたものは悪以外によろこびがない（Ⅰ 一六〇）。そしてミルトンはサタンの内面を次のように説明する。

　　恐怖と疑い彼の苦しき
思いを千々に乱し、根底から心中の
地獄をかきたてり、彼の心中に又周りに
地獄を持ち歩く故、まして地獄から
一歩も逃れえず、所変わるも己れから逃れ

えぬ如し、今や良心は眠りし絶望を醒まし
苦々しき想起をよび醒ます、すなわち
過去と現在とさらに悪化必定の己が
状を、悪しき業に悪しき痛みつきまとう、
（Ⅳ 一八―二六）

そしてミルトンはサタンに「悔恨よさらば：すべての善はわれに失せり／悪よわが善となれ」（Ⅳ 一〇九―一一〇）と叫ばせる。サタンは一切の善の喪失から悪に居直っている絶望的な存在であり、アダムとエバに同じ善の喪失を経験させようとして成功する。そしてこの善の喪失に対してアダムとエバが目ざめることになったことは注目すべきことである。

この部分をくわしくしらべるためにもう一度創世記の記事とミルトンの詩を比較してみることにする。創世記三：五は次のようになっている。

「……それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」

それにあたるミルトンの詩Ⅸ 七〇五―七〇九は次のようになっている。

彼（神）は知る、汝ら
それを食う日に、澄みたる如くなれど
その実くもる汝らの目が、その時完全に
開けて澄み、かつ神々の如くなると
善も悪も神々の如く知るに至りて、

以上の比較から創世記の記事はほぼミルトンの詩に受けつがれていることがわかる。

次にアダムとエバが善悪を知る木の実を食べた結果について創世記の記事とミルトンの詩を比較してみる。創世記三：七は次のようになっている。

すると、ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。

それにあたるミルトンの詩は説明の部分とアダムの独白

とからなっている。はじめの説明の部分はIX 一〇五一—一〇五九で次のようである。

彼らおきぬ
心やすまぬかの如く、又互いを見つつ
やがて知れり、いかに目が開け又心が
暗くなりたるかを、無邪気はヴェールとして
悪を知ることから二人を覆いたりしが消え
去り、又正しき信頼も生れつきの正しさも
名誉も彼の周りから去りて、裸となし
罪恥に渡せり、罪恥は覆えどその衣
更に露となせり、

そしてアダムの独白はIX 一〇七〇—一〇八〇で次のようである。

われらの目
開けし故、まことに見出し、見出して知る
善と悪を、善は失われ悪が得られしを、
これが知ることなれば、知識の悪しき実
それ斯くわれらを裸形となし、名誉なし
潔白も、真実も、純潔もなしとする、
われらの日頃のかざりも今は汚れ穢れて
又われらの面に歴然たるは悪しき
色慾のしるし、それ故数多の悪集まる、
恥さえ、諸悪の殿[10]なるに、初めにつきては
更に確かなれ、

創世記三：五と三：七の記事はともに簡潔に出来事のみをしるしているので、その因果関係をどう理解すべきかは難しい。ミルトン自身は詩人らしい独自の見方をもって詩をかいているが、それが果して神学的に正しい見方かどうかここでは詮索の必要はないだろう。たしかに「目が開け」たことはミルトンの詩に受け入れられているが、何に目が開けたかは創世記とミルトンの詩とでは正確に同じには見えない。

創世記によれば二人は裸であることに目が開けたことになっている。へびのそそのかしは善悪を知る木の実を食べれば目が開けて神々のように善悪を知るものになるというのであった。創世記の記事は二人が明らかにへびにだまさ

れたその衝撃の大きさを伝えている。それは罪に対する神の審きの重さに対する目ざめを示しているともいえよう。罪の重さは罪を犯して初めて知られるといってもいいかも知れない。

しかしミルトンは「目が開け」たことは心を暗くし、無邪気さが消えて高貴な性質が失われて恥を得たことをしるし、これは「目が開け」たことが善悪の知識を得たことになったからだといい、ただし、善悪の知識を得たということは悪を得て善を失うという屈折を通して来たというのである。

以上の比較から見て、罪を犯したアダムとエバに及んだ変化について創世記の記事とミルトンの詩にはくいちがいがあるように思われる。創世記三：五及び三：七のコンテクストを読むかぎり、へびの約束はまったくのだましであり、アダムとエバのうけた衝撃は大きいことを理解することができる。しかしミルトンは、たとえへびの約束がうそであっても創世記三：五及び三：七の記事が共に「目が開け」るということばが共通であることから、「目が開け」ることを重視したのであろう。

そうしてミルトンは「善悪を知る木」という木の名と「善悪を知るものとなる」というへびの約束にそってIX一〇五―一〇八を書き、たしかに善悪を知る者となったという結果をみちびきだすことが正しいと考えたにちがいない。言いかえればミルトンの意見では、サタンは全くうそをついたというより本当のことをいったのであるということになろう。それ故、ミルトンは「裸であることがわかった」という恥の自覚の発生には何らかの意味で善悪を関係させる必要を感じたのであろう。しかもミルトンは創世記三：二二の「みよ、人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るものとなった……」を意識していたのかもしれない。[11] 少くとも創世記三：七の「裸であることがわかった」は善悪を知ったことを示すことになると考えたことはたしかである。

むすび

ミルトンは *Paradise Lost* 四巻の冒頭に於て次のように読者に語る。

ああもしかの警声がありしなら、それ

黙示を見し者、天に大音声にききし声
時まさに、かの竜が再敗を喫して
人に復しゅうせんとて怒りて降りし時
「地に住む者らわざわいなるかな」と今
時ある間に、最初の親達があらかじめ
彼らの秘密の敵の到来を警告され、免れ、
然り恐らくその死の罠を免れしものを、今
サタンは今初めて怒りにもえて降りたり

（Ⅳ 一―九）

「地に住む者らわざわいなるかな」はヨハネ黙示録の記者が示す預言の声である。（創世記一二：一二）黙示録の記者はこの声を幻の中に聞いたのである。丁度サタンが地上に降りて人間をまどわそうとしているその危機的状況の緊迫性を示す言葉である。それはヨハネ黙示録の記者にのみ聞えた大音声である、しかしミルトン自身は今語ろうとする詩の中のアダムとエバに警告として叫びたかったのであろう。果たしてこれをミルトンが読者に緊迫したおそろしさを伝えようとする為であったのか、それともアダムとエバに「目醒めよ」と叫びたくても叫べないもどかしさを伝えるものなのか議論が分れるところであろう。(12)

実際にミルトンはこのあと人に警告をきかしめる。すなわちラファエルが神の命をうけてアダムに警告をする場面を設けているのである。そしてラファエルはアダムに理性的なものを愛せよという。しかし警告をうけていたアダムの反応は不充分であったし、そこにはすでに危険がひそんでいたことを私は（Ⅰ）に於て示した。

さてそのようなアダムもエバにむかっては理性を強調する。そして目ざめよと説得するのである。しかしエバはアダムの説得には全く応じなかったことを私は（Ⅲ）に於て示した。結局エバはへびのそそのかしにより善悪を知る木の実を食べて神の禁制を破る。そのそそのかしはその木の実を食べれば目がひらけて神々のように善悪を知るものになるというのであった。以上が（Ⅳ）の内容である。

以上の内容を通覧するに、ミルトン自身が物語の中のアダムとエバに「目を開かせて」やりたいができないという心苦しさを宣明してサタンと人との出合いを導入していることに気づく。それはミルトン自身のはげしい悶えというものをあらわしている。それは、すべてが予見できる詩人の立場に立って警告しようとしても物語の制約上ゆるされ

ないことであるからである。

しかしたとえアダムとエバが警告を聞いたとしても目がさめなければ何の効果もないことを詩人はラファエル及びアダムがそれぞれ果した警告の引き継ぎの中に描いていった。すなわちエバはへびの「神々のごとく目が開ける」というそそのかしにのせられてしまったのである。

注

(1) 日本聖書協会一九五五年訳版

(2) *A Milton Encyclopedia*, Vol. 6, p. 60,

(3) Cf. *PL* 137—143.

(4) Fowler は *The Poems of Milton*, 1968 (Longman) に於ける *PL* VIII 588 *n* に於て passion が reason をくつがえす (overthrow) といっている。しかしアダムはのちにエバに理性を説いている。

(5) V. 69—70→IX. 708—709.
V. 44—47→IX. 608—612.
V. 60—63→IX. 703—705.

(6) 信仰・愛・徳がひとりで試みられてこそ本物であるというエバの考え方はエバを自らの判断で行動を決定する自由意志の存在たらしめている。しかしエバの態度は自由意志を理性にかなって用いる責任ある態度とはちがっている。

(7) Fowler, p. 876, IX. 360—1*n*.

(8) *PL* XII. 83—84.

(9) *PL* IX. 354—5.

(10) Cf. *PL* XI. 410—416.
ここで実は目が開けたのではなく目に膜ができたことがこのところでわかる。

(11) *The Interpreter's Bible*, Abingdon Press, 1952 によれば創世記三：二二は創世記全体のコンテクストの本筋からはなれている。

(12) 黙示録の中で a loud voice となっている部分は *Paradise Lost* の中では that warning voice となりミルトンは O for……をつけ加えて用いていることは次のことを意味するものと思われる。
① 創世記の物語をふまえたこの詩に、黙示録の中のヨハネがきいたことばを距離を示す that (かの) という単語を附して用いていること。
② O for をつけたことはヨハネがきいた声は人祖に対する警告となりえただろうがという仮定的な気持を示しているがそれだけでなく残念な気持をも示していること。
③ ミルトンが黙示録のことばを引用したのは決して〈サ

タンの襲来をおそろしいものにしようとした〉(Newton) のではなく〈ミルトンが人祖アダムとエバにサタンの襲来のいみに目醒めさせたかったという個人的な気持を示したかった〉(Empson) からである。

Fowler が iv. 1—12*n* に於て Empson の意見をとり上げて批判している。即ち Empson はミルトンが自らアダムとエバに警告できればよかったと思ったのはラファエルの警告に何か不充分な (inadequate) ものがあるとミルトンが感じたことを示しているといっているのである。Fowler はラファエルの警告はまだ先のことであるから Empson がこの時点でラファエルの警告を不充分だと考える筈がないから Empson の思いちがいがそこにあるというのである。しかしミルトンは予めラファエルの役割をおだやかな警告者として考えていたにちがいないし、しかも人祖がその警告の重みを充分に自覚していないものとして考えていたにちがいないということはいえるであろう。